



祭りとは、祀りである。
 神々と一体化し豊穡への祈り、そして
 海と空と大地への感謝の気持ち。

暮らしの中で
 自然に触れ、
 神の気配を知る所。

空も海も真近く感じる千穂ヶ峰の神倉神社から新宮の町を望む。ゴトビキ岩は熊野で最初に熊野の神が降臨した場所であるといわれている



中上健次(なかがみけんじ) / 和歌山県新宮市生まれの小説家。「峠」で第74回芥川賞を受賞。地元お燈祭りをこよなく愛した。



左 / 中上紀(なかがみのり) / 中上健次・紀和鏡夫妻の長女。高校、大学時代をカリフォルニアとハワイで過ごし、1999年、ビルマ紀行を上梓。「彼女のプレнка」ですばる文学賞受賞作家として活躍する。右 / 紀さんの長男、寧音(ネオ)君は今年二回目の上り子に挑戦。

注ぎ込んだ男たちの、解放感に満たされた笑顔が眩しかった。

開門の合図に高揚した雄叫びが麓に届く。溶岩のごとく山を下り、麓の「海」に

る。神話にて、神武を救ったのも布津御魂(フツノミコタマ)という剣だった。

姿は山伏のようだ。祭りでは、神職によって巨大な松明と共に鉦(まがかり)が奉納される。上り子が松明に頂く御神火は、古より熊野が深く関わってきた製鉄の歴史も象徴する。

神倉山は高い山ではないが、ご神体である霊石ゴトビキ岩、リングガに似た巨岩が遠くからもよく見えることから、神武が目指した天磐盾だとも言われる。もともと、神話以前からの重要な盤座信仰の拠点だった。岩の下からは、古代の祭祀跡や銅鐸が出ている。また、ここは修験道の道場でもある。その名残か、上り子たちの

に抱かれているかと思いつきながら、愛しき下り龍(カミ)が動き出す。

神倉山の麓に向かう途中、女たちの目に映ったのは、火の灯った無数の松明で燃えているかのごとき山だった。生きている者の命も、死者の命も、皆等しく神の炎

りにはあると父は言った。

食するといった精進潔斎を経て、男たちは白装束を纏い、わらじを履き、荒縄を腰に巻く。夕方近くになると往来に出、町のそこで振る舞われる酒をいただき、「たのむで」と松明を打ちつけ合いながら阿須賀神社、速玉大社を回り、神倉山を目指す。男であれば出身や年齢を問わず誰もが、この千四百年の歴史を持つ祭りの上り子になれるため、全国から参加者が集まる。この「お燈」に上るために毎年欠かさず帰郷していたのは、中上健次だ。滾る血を抑えられなくなる何かが、お燈祭りにはあると父は言った。

二月六日のお燈祭りは、新宮の正月である。この日、襦をし、白いもののみを飲食するといった精進潔斎を経て、男たちは白装束を纏い、わらじを履き、荒縄を腰に巻く。夕方近くになると往来に出、町のそこで振る舞われる酒をいただき、「たのむで」と松明を打ちつけ合いながら阿須賀神社、速玉大社を回り、神倉山を目指す。男であれば出身や年齢を問わず誰もが、この千四百年の歴史を持つ祭りの上り子になれるため、全国から参加者が集まる。この「お燈」に上るために毎年欠かさず帰郷していたのは、中上健次だ。滾る血を抑えられなくなる何かが、お燈祭りにはあると父は言った。

神の火に抱かれる

中上紀
 Nakagami Nori



古代より万物に生命が宿り、そこに神の存在を感じてきた日本人。自然が色濃く残る紀伊半島では、神仏は混交して存在する。熊野の神が降臨したゴトビキ岩は、1400年以上続く熊野御燈祭の地。眼下に広がる新宮は、海と山に挟まれた聖地だ。祭りの日、暗くなるに従い町中が高揚していく。男衆の荒々しさが空気に伝わる。自然と人と町が一体化した瞬間、燃え盛る龍が急坂を駆け下る。

5elements

blessings of nature

- ①ゴトビキ岩をご神体とする神倉神社
- ②大浜で禊ぎを行う上り子たち
- ③燃え盛る松明。上り子たちは一筋の下り龍となる
- ④代参の松明
- ⑤「おめでどうございます」。お清めのお酒が振る舞われる
- ⑥「たのむで」すれ違い様に声を掛け合い松明を打ち付ける

